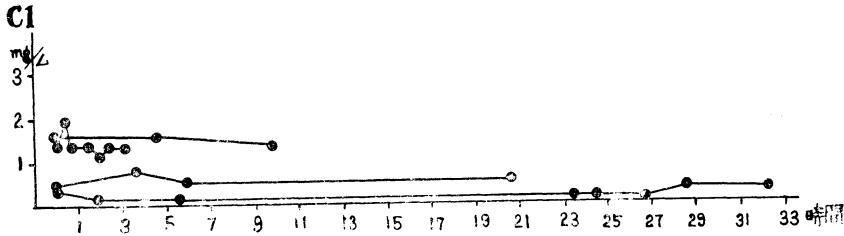


第6図 塩素イオン濃度の増加するもの



第7図 塩素イオン濃度の不規則に増減するもの

変化がみられることがある。

本研究については、三宅泰雄教授、高橋浩一郎博士および気象研究所地球化学研究室の方々に、御教示をいただいた。謹んで謝意を表する。

参 考 文 献

- 1) Y. Miyake and Y. Sugiura, 1954: The chemical studies of rain water accompanied by a Typhoon. Geophys. Mag., 26, 29-34.
- 2) 菅原 健, 寺田喜久雄, 川崎暢子, 1956: 雨の中の化学成分の時間的変化の基本的形式について, 日本化学会第9年会(昭和31年4月, 京都)講演.
- 3) I. Iwasaki, S. Utsumi, T. Ozawa, T. Tarutani, H. Fukutomi, T. Ohmori and M. Kawada,

1964: Variation of chemical composition in a rainfall. RECENT RESEARCHES IN THE FIELDS OF HYDROSPHERE, ATMOSPHERE AND NUCLEAR GEOCHEMISTRY. 357-363.

- 4) T. Takahashi, 1963: Chemical composition of snow in relation to their crystal shape. Jour. meteor. Soc. Japan, Ser II, 41, 6, 327-336.
- 5) 松平康男, 川本彊雄, 1953: 気圧配置と降水の化学的性状について, 空と海, 30, 62-66.
- 6) U. Takeuchi and Z. Nakazawa, 1951: On the relation between chlorinity of rain water and air mass. Geophys. Mag., 23, 23-24.
- 7) 三宅泰雄, 北野 康, 1960: 水質化学分析法 (地人書館) 79-80.

<書 評>

倉嶋 厚著: 日本の気候, B6版, 253p, 600円, 古今書院

本書は昭和33年に和達清夫博士監修で刊行された大著と比べるとまことに瀟洒な書物である。日本の気候について書かれたこれまでの書物と比べて、本書が持つ著しい特色は、一つは日本の気候を世界的な視野から展望してその特質を明らかにした点であり、もう一つの面はとくに季節の変化に焦点を合わせて、総観気候学の知識を縦横に駆使して書かれていることである。

日本に住み、気象学に関心を抱いている人々の多くは

すでに日本の気候は余りに身近なものになりすぎていて、知りつくしているように思われるかもしれない。しかし、多年にわたり予報現業で培われた著者の天候推移と天気現象に対する洞察と、たゆまぬ努力により蓄積された学識によって裏付けされた本書を読んで、私は数多くの事柄について認識を新たにした。本書には120枚以上の図表が掲載されているが、その多くは著者が新しく作ったものである。

内容は非常に豊富であり、しかも読みやすい書物である。予報現業にたずさわる人々にも役立つ点が多い。

(河村 武)